

地名一覽

Belorus	ベラルーシ	Ivanovsky	イワンコフスキー
Bober	ボビョール	Kaluga	カルーガ
Borodnansky	ボロドニャンスキー	Karachai	カラチャイ湖
Bragin	ブラーギン	Khoinski	ホイニキ
Bryansk	ブリヤンスク	Khotinsk	コティンスク
Chelyabinsk	チェリャピンスク	Khvastovich	クワストビッチ
Cherkassk	チェルカッスク	Kiev	キエフ
Chernigov	チェルニゴフ	Kirov	キロフ
Chernobyl	チェルノブイリ	Kirovograd	キロヴォグラード
Chistogolovka	チストゴロフカ	Klinzovsky	クリントフスキ
Chudyany	チュデュヤニー	Kopachi	コパチ
Darnitsa	ダルニツァ	Krasnopolye	クラスノポリエ
Donetsk	ドネツク	Klintoovsky	クリントフスキ
Gomel	ゴメリ	Kurchatov	クルチャトフ
Iset	イセツト	Kurgan	クルガン
Ivankovo	イワンコーヴォ	Kysthym	キシュチム
		Latvia	ラトビア
		Leningrad	レニングラード
		Livernore	リバーモア

Makarovsky	マカロフスキー	Russia	ロシア
Mayak	マヤック	Semipalatinsk	セミパラチンスク
Metlino	メトリノ	Sevastopol	セバストポール
Mogilyov	モギリョフ	Sharashka	シャラシユカ
Moscow	モスクワ	Shevchenkovo	シェフチェンコボ
Muslimovo	ムスリモヴォ	Skazochny	スカゾクニー
Nadyrovo	ナディロヴォ	Stary Vysnkov	スタリー・ビシュコフ
Narodichi	ナロディッチ	Sverdlovsk	スベルドロフスク
Narovlya	ナロブリヤ	Techa	テチャ
Novozybkov	ノボチコフ	Techa-Brod	テチャ・ブロード
Obninsk	オブニンスク	Tolsty Les	トルステイ・レス
Oryol	オリョール	Tula	ツーラ
Ovruch	オヴルッチ	Tyumen	チュメン
Pochep	ポチェップ	Ukraine	ウクライナ
Poleskoye	ポレツスコエ	Ulyanovsk	ウルヤノフスク
Polesye	ポレシエ	Veprin	ヴェプリン
Pripyat	プリピャチ	Vyshgorod	ビシュゴロド
Pushchino	プシユチーノ	Yagotin	ヤゴティン
Rovno	ロブノ	Yasen	ヤーセン

Zhitomir
Zhizdra
Zhulyany

ジ
ト
ミ
ー
ル

ジ
イ
ヅ
ド
ラ

ジ
ュ
リ
ヤ
ニ
ー

登場人物一覧

Abagyan	アバギヤン	Baraboy	バラボーイ
Adamovich	アダモヴィッチ	Baranov	バラノフ
Akhiezer	アクハイエツァー	Baryakhtar	バリヤフタール
Akhromeev	アクロメエフ	Batsanov	バツァーノフ
Aleksakhin	アレクサーキン	Belle	ベレ
Ales Adamovich	アレス・アダモヴィッチ	Belokon	ベロコン
Alexander Kuzin	アセクサンダー・クージン	Belyaev	ベルヤエフ
Alexeev	アレクセエフ	Bisogolovoy	バイソゴロヴィー
Altunin	アルツニン	Blokhin	ブロヒン
Anatoly Lukyanov	アナトリー・ルキヤノフ	Bobyleva	ボビレワ
Antipov	アンティポフ	Bochkov	ボチコフ
Arkhangel'skaya	アルハンゲルスカヤ	Bogolyubov	ボゴリュボフ
Armand Hammer	アーマンド・ハマー	Borisev	ボリソフ
Back	バック	Borovkova	ボロフコワ
Baisogolov	バイソゴロフ	Bronnikov	ブロンニコフ
Balabukha	バラブハ	Bryukhanov	ブリュハノフ
		Buldakov	ブルダコフ
		Budko	ブデュコ
		Burenkov	ブレンコフ

Burgasov	ブルガソフ	Eisenbud	アイゼンバッド
Burnazyan	ブルナジヤン	Fermi	フェルミ
Catsch	カーツ	Filyushkin	フィリュシュキン
Chazov	チャゾフ	Fradkin	フラドキン
Chernousenko	チェルノウセンコ	Frank	フランク
Chernov	チェルノフ	Gail	ゲイル
Chernyak	チェルニヤック	Gasilina	ガシーリナ
Chertkov	チェルツコフ	Gasteva	ガステワ
Dan Beninson	ダン・ベニンソン	Gembitsky	ゲンビツキー
Daniil Granin	ダニール・グラニン	Gerasimov	ゲラシモフ
Davydov	ダビドフ	Gimadova	ギマドワ
Dedenkov	デデンコフ	Ginter	ギンター
Demin	デミン	Glazunov	グラスノフ
Denissevich	デニセヴィッチ	Gogin	ゴーギン
Denisov	デニソフ	Gonzalez	ゴンザレス
Doguzhiev	ドグジエフ	Gosplan	ゴスプラン
Doshchenko	ドシュチェンコ	Gorbachev	ゴルバチョフ
Dubrovina	ドゥブロビナ	Gordeyev	ゴルデイエフ
Dzharakian	ザラキアン	Gorizontov	ゴリゾントフ

Gotovchits	ゴトフチツツ	Kasyanenko	カジャネンコ
Grebeschewa	グレベシエーワ	Keirim-Markus	ケーリム・マーカス
Grigorryev	グリゴリエフ	Keizer	カイザー
Grishchenko	グリシュチェンコ	Kenik	ケニック
Grodzinsky	グロジンスキー	Khrushch	クルーッシュ
Gubanov	グバノフ	Kiryushkin	キリューシキン
Gulko	グルコ	Klechkovsky	クレツコブスキー
Gusev	グセフ	Krajfi	ナフル
Guskova	グシュコワ	Knizhnikov	クニジニコフ
Hans Blix	ハンス・ブリックス	Knunyants	クニュニャンツ
Heisenberg	ヘイゼンブルグ	Kochetkov	コチュエトコフ
Herve	ヘルベ	Kochetov	コチュエトフ
Ignatenko	イグナテンコ	Komarov	コマロフ
Inyakin	イニャーキン	Kondrusev	コンデュルセフ
Ivanikov	イワンニコフ	Konoplya	コノプルヤ
Ivanov	イワノフ	Konstantinov	コンスタンチノフ
Ivanovich	イワノビッチ	Konviz	コンビツツ
Ivan Stepanovich	イワン・ストパノヴィッチ	Kopayev	コパエフ
Izrael	イズラエル	Kosenko	コセンコ

Koshurnikova	コシュルニコバ
Kozlovsky	コズロフスキー
Kraiter	クライター
Krasnov	クラスノフ
Krotkov	クロトコフ
Kurshakov	クルシャコフ
Kuzin	クジン
Laura Fermi	ローラ・フェルミ
Lebedev	レベデフ
Legasov	レガソフ
Lepakhin	レパーキン
Letavet	レタベト
Leturneau	レチュニユ
Levitsky	レブツスキー
Levochkin	レヴォツキン
Ligachev	リガチェフ
Ligasov	レガソフ
Likhtarev	リフタレフ
Linge	リンゲ
Los	ロス
Luchnik	ルチニク
Lukash	ルカシュ
Lukonin	ルコーニン
Lukyanov	ルキヤノフ
Lupandin	ルパンディン
Lyaginskaya	リャギンスカヤ
Lyashko	リャシュコ
Lysenko	リセンコ
Lyzlov	リズロフ
Marei	マレイ
Margulis	マルギリス
Markus	マルクス
Martirosov	マルチロソフ
Maryin	マリーン
Maskalev	マスカレフ
Mayorets	マヨレッツ
Meshkov	メシュコフ
Mettler	メットラー

Morokhov	モロコフ	Pavlovsky	パヴロフスキー
Moshchik	モシュチック	Pellerin	ペレリン
Moskalyov	モスカルヨフ	Pertsov	ペルトソフ
Moskvichev	モスクヴィチェフ	Petrusheva	ペトルシェバ
Mozzhukhin	モズジューヒン	Petryanov-Sokolov	ペトリアノフ・ソコロフ
Neruda	ネルダ	Pikalov	ピカロフ
Nevstruyeva	ネブストルエバ	Platonov	プラトノフ
Niels Bohr	ニールス・ボア	Polyansky	ポリアンスキー
Nigiyani	ニギヤン	Ponomareva	ポノマリョワ
Nigrovic	ニグロビック	Popov	ポポフ
Nikipelov	ニキペロフ	Potapov	ポタポフ
Nikolai Suvorov	ニコライ・スボロフ	Preston	プレストン
Norets	ノレッツ	Prisizhniuk	プリシャジュニユク
Obozinsky	オボジンスキー	Protsenko	プロチェンコ
Okladnikova	オクラディニコワ	Pyotr Zakonov	ピョートル・ザコノフ
Orlova	オルロバ	Ramzayev	ラムザエフ
Osanov	オサノフ	Razumovsky	ラズモフスキ
Paribok	パリボック	Reschetov	レシェトフ
Parr	パール	Resconie	レスコニー

Rodionov	ロディオノフ	Semiyonov	セシヨノフ
Rogozkin	ロゴズキン	Sergeev	セルゲエフ
Romanenko	ロマネンコ	Sevankaev	セワンカエフ
Romanov	ロマノフ	Shagalov	シャガロフ
Ryadov	リヤドフ	Shakhmatov	シャフマトフ
Ryzhkov	リジュコフ	Shamov	シャモフ
Sakov	セーコフ	Shandala	シャンダラ
Safonov	サフォノフ	Shchepin	シェピン
Samolienko	サモイレニコ	Shevchenko	シェフチェニコ
Sanotsky	サノツキー	Shmakov	シュマコフ
Saurov	サウロフ	Shvydko	シブドコ
Savchenko	サフチェンコ	Sidorenko	シドレンコ
Savkin	サフキン	Silayev	シラエフ
Scherbina	シェルビーナ	Skok	スコック
Shchepin	シェピン	Slyunkov	スリュンコフ
Scherbak	シェルバック	Smid	スミッド
Scherbitsky	シェルビツキー	Smirnov	スミルノフ
Sedunov	セデュノフ	Smolyar	スモリャール
Selidovkin	セリドフキン	Sokolovsky	ソコロフスキー

Spizhenko	スピジエンコ	Vasin	バシン
Stepanenko	ステパネンコ	Vera Balabukha	ベラ・バラブハ
Streltsova	ストレルツォーバ	Vitaly Doguzhiev	ビターリ・ドグジエフ
Studentkin	スチュデニキン	Vladimir Vassilyevich	ウラジミール・ヴァシレヴィッチ
Suvorov	スヴォロフ	Vladimirov	ウラディミロフ
Tarusov	タルソフ	Vorobyev	ヴォロヴィエフ
Tatyana Karyagina	タチヤーナ・カリャギーナ	Voronin	ヴォローニン
Telyatnikov	テリャトニコフ	Vorotnikov	ヴォロトニコフ
Tereschenchenko	テレシチュエンコ	Voznesensky	ボズネセンスキー
Timashuk	ティマシュク	Weight	ウェイト
Timofeyev	ティモフエエフ	Yarmonenko	ヤルモネンコ
Timofeyev-Resovsky	ティモフエイエフ・レンフスキー	Yavorivsky	ヤヴォリフスキー
Tkacheva	トカチェワ	Yemanova	エマノバ
Toporkova	トポルコワ	Yuri Antonievich	ユーリ・アントニエヴィッチ
Tregubenko	トレグベンコ	Yuri Izrael	ユーリ・イズラエル
Trofim Lysenko	トロフィム・リセンコ	Yurkin	ユルキン
Tukov	チュコフ	Yurlov	ユルロフ
Tutelian	チュテリアン	Zabelin	ザベリン
Valery Legasov	ヴァレリー・レガソフ	Zaichenko	ザイチェンコ

Zbigniew Yaworowsky	ズビクニェフ・ヤボロフスキ
Zborovsky	ズボロフスキー
Zedgenidze	ゼジェニージェ
Zelinsky	ゼリンスキー
Znakov	ジャコフ
Zherbin	ゼルビン
Zhelentsov	ゼレンソフ
Zhikharev	ジハレフ
Zhores Medvedev	ゾーレス・メドヴェデフ

あとがきにかえて

人類にとって忘れることのできない出来事となったチェルノブイリ事故から十年以上が過ぎた。この事故は、あらゆる方面、すなわち政治、公的機関、マスメディア、科学者、医師、環境学者、又同様に国際機関、人道援助団体、そして最も考慮されるべき、事故に直接巻き込まれた数十万人の人々の関心を、他のどんな事故よりも引き付けた。

残念ながら、事故後の渦中で社会の中で世論が高まって行く中、噂話や推論、でっち上げや専門家以外の事故後の障害の推論が、この非常に混乱した状況で、偏りなく真実を見ようとする試みや、十分な対策をとることの妨げとなった。数多くの要因が事故の被害の量的な側面において、間違った考えを引き起こす引き金となっている。

過去二、三年に、初期の頃とは全く違う観点で被害の悲観的な部分の再評価とその相対的な重要性を再考しようという流れが起こってきた。チェルノブイリの医学的、生物学的影響の調査を含め、事故の正しい評価と様々な方面の重要な情報交換の客観的な分析に対する流れが、徐々に社会に現れている。

我々は、現在より多くの科学者や専門家が、人々の生活や健康への事故のダメージの総合的評価には社会的、心理学的な要因が大きく関わってくることに気付き始めたという事実は、基本的に重要であると考えている。何人かの学者は、チェルノブイリ原発事故を社会的、心理学的事故とみなしている。

しかしながら、誰もがこの結論、すなわち放射能は疾病率や死亡率の上昇を伴い、身体的心理的疾患の原因となるということを認めた訳ではない。典型的な例と事実を挙げることによって、我々は、チェルノブイリ事故の原因と健康への影響を分析する上で、住民の健康状態を計る指標にマイナスの条件を与える、違う特性をもつ要因の重要性と役割を相関させることが非常に重要であると、この本の中で述べようとしてきた。そうすることで、科学や実践によって実証

されるよりむしろ、人々を容易に希望通りに治療しようというような意見や考えをもつ人によって、人々が誘導されないようにするのである。

我々はこの本の中で、その影響が極めて明らかである（例えば白血病や甲状腺腫瘍を引き起こすという事実）場合の放射線の影響を過小評価することは許されないという点は強調してきた。しかし、これらの要因に注意を向けすぎてしまい、人々の間の普通の疾病の増加すら、放射線によるものとみなすべきではない。マスメディアや、この分野の専門家以外の公人、そして自分がこの分野の専門家であると勘違いをしている自称「専門家」によって、事故の悪影響の誇張は、事故の被害を受けた多くの人々を、自分や子孫の将来という点で失望させた。良く知られている通り、このような精神的ストレスはとても大きな負担となり、多くの健康障害の原因となっている。心理的な過剰な負荷は、社会保障や医療、生活改善を担当する地方当局や政府の無関心で無責任な事務的対応によってよりひどくなっている。

我々の社会は、最終的にチェルノブイリの汚染地区に住む人々の健康や生活の質に影響を与えたチェルノブイリ事故の社会的、心理的なマイナスのダメージは様々な要因によると認識しなければならない。これらの要因の中には、精神的弱さだけでなく、貧困ということも大きく関与している。産業の発展や総生産の向上のために、人々の安全や環境のことを無視して、危険性のある技術を発明し使用するべきではない。もしこの要求が聞き入れられないならば、遅かれ早かれ恐ろしい災害が起こるのは免れないであろう。チェルノブイリは顕著な一例である。安全操作や監視、放射線防護に関しては、わずかな予算しか割り当てられなかった。すなわち、技術者の訓練の不十分さと、非常事態での国家システムの実動的な機関に対する、上層部の役人たちの無責任さが相まって、チェルノブイリ事故の被害を解決する上で非常に複雑な問題を作り出す主な原因となっている。除染作業は、主に作業員による、全ての困難に打ち勝とうという、個人的英雄思想や自己犠牲の御陰でうまく行われた。彼らは、「核の魔王」を元の器に収めるべく全力を尽くした。

今日、チェルノブイリ事故の教訓を忘れがちなっているので、再度、振り返る必要があるだろう。チェルノブイリ

事故以後、この国の、また旧ソ連からの国々の状況は基本的に変わっていない。現在我々は、それらの教訓についての宣言や、このような事故を予防し、事故後の影響を減少させるための努力を、ほとんど目にすることがない。これまで述べてきたような多くの理由から、チェルノブイリ原発事故以後の重要な社会的心理的被害を止めることはできないということは明らかである。事故後一〇年余りが過ぎたが、原発の安全性は改善されていない。チェルノブイリ神話を取り除き、人々の心の中の嘘を取り除くには長い茨の道がある。被害を受けた人々の将来に自信をとり戻し、彼らの子供たちにも将来はあるという、樂觀的な考えを持てるようにしていくことが、我々の最終的な目的である。これらの課題をこれから担って行く科学者、専門家、教育者、ジャーナリスト、公的人物は、チェルノブイリ事故に関するヒステリーを生み出すことに関与した煽動家やそういう人々によって非難、追放され、不条理に攻撃されるかもしれない。しかし、真実への道はこれしかない。嘘と客観的な情報とを区別するには時間がかかるかもしれない。しかしそれによって、チェルノブイリの作り話を排除し、科学的根拠への信頼を増やし、事故を客観的に示して行けるであろう。

L. A. イリーン

監修後記

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、在外被爆者および世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として一九九二年に設立されました。長崎がもつ被爆者医療の実績および放射線障害に関する調査研究の成果を、ヒバクシャ医療に有効に活用してもらうため、国外からの医師等の受け入れ研修、国外からの被爆者の渡日治療等を実施し、ヒバクシャ医療を通じて、長崎から世界へ貢献し、国際協力の推進に努めています。その中の活動の一つに、放射線ヒバクシャ医療出版事業があります。

すでに一九九五年度には、ロシア語で、「放射能Q&A」を、英語で、「長崎シンポジウム…放射線と人体」を出版、一九九六年度は「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民および家畜の健康状態」を翻訳出版。さらにVTR「カザフスタンの今」を制作し、国内外におけるヒバクシャ医療における幅広い貢献をしてきました。

今回の翻訳出版事業は一九九七年度NASHIM事業の一つに依るものですが、一九九五年以来、関係部局と会談を重ね準備をしてきたものです。従来からのチェルノブイリ原発事故の報告は新聞報道関係が先行し、厚いベールに囲まれた旧ソ連邦内部からの放射線事故の詳細は一般にはわかりづらいところが多かったようです。事実、事故当時は、被害の甚大さを誇張するものから、軽微さを強調するものまでありとあらゆる風聞が世界中を駆けめぐりました。しかし、十二年後のいま、世界はチェルノブイリ原発事故の与えた人体影響、社会問題について確実なものは何であったのか、多くのことを学びつつあります。その被害の大きさは歴史にその名を残すことは間違いないでしょうが、人類はその英知で、何をこの悲劇から学んでいくのでしょうか。

「チェルノブイリ…虚偽と真実」は従来のチェルノブイリ関係の翻訳本からすれば、かなり異色のものとなりました。

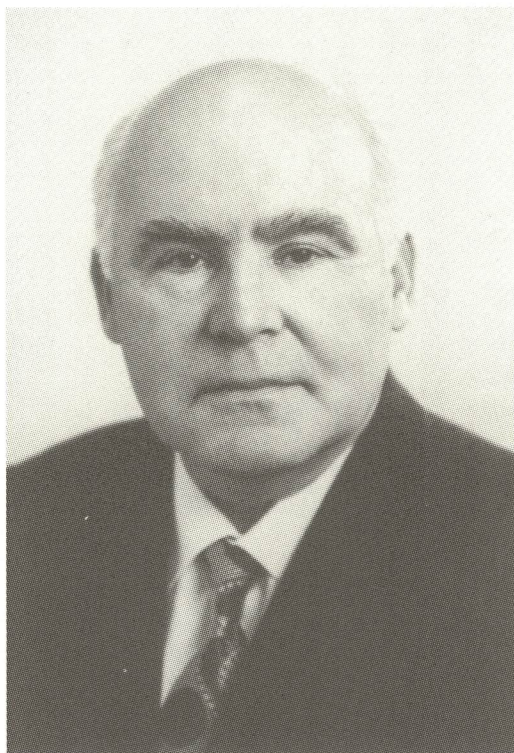
それは旧ソ連側のまさに体制の中にいた、いや今でもモスクワ放射線物理学研究所の最高權威であり、国の代表として長年放射線関連プロジェクトの中枢にいるイリイン博士そのものの作によるものだからでしょう。厳しさの中にも、誠実で温厚なお人柄ですが、激しいマスメディア関連の非難の矢面にたたされても決して臆することなく、堂々と論陣を張られた姿勢が、本書の中にもたびたびでています。また旧ソ連邦の放射線科学の歴史と世界の放射線関連の科学界との関わりを知るにも格好の書となっています。立場上、発言の制限や自己中心的な表現が散見されますが、ご理解いただきたいと存じます。その為、ジャーナリストの作とは異なり、いわゆる体制側と言われている代表者の代弁のきらいも否定できません。しかし、真実を見極めるためにはこれらの発言に耳を傾ける謙虚さも必要でしょう。そこで、正しくチュルノブイリを理解する一助になると考え、あえてN A S H I M の放射線ヒバクシャ医療出版事業に取り上げさせていただきました。

原著に忠実に訳したところと、わかりにくいところは意識した部分もあります。翻訳作業は、長崎大学医学部の有志が無償で貢献してくれました。英語訳は原則として第一版を主に、その後ロシア語第二版との対応作業を行いました。今後とも、関連分野の報告書などが翻訳出版されることと思いますが、旧ソ連邦に対する正しい理解と、放射線に関連する正しい知識の一助になれば、翻訳に携わった者の喜びでもあります。

最後に、翻訳に関する誤りや解説の不備な点はひとえに監訳者の責任であり、訂正その他お気づきの点ご一報頂ければ幸いです。

長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設

教授 山下俊一



著者略歴

ロシア科学アカデミー会員、国際放射線防護委員会委員。1923年生まれ。1953年、サンクトペテルスブルグ医科大学卒業。海軍医を経た後、1961—1968年、サンクトペテルスブルグ放射線衛生研究所部門長。

1968年よりモスクワの生物物理学研究所所長。1984—1990年にはソ連医科学アカデミー副総裁を務める。又、ソ連（1972—1991）及びロシア連邦（1991年—）の原子力及び放射線の影響に関する国連委員会のメンバーを務め、93年からは国際放射線防護委員会の委員に選出される。専門分野は、放射線医学及び放射線防護学。また、人体における放射線障害や、放射線被曝時の防護に関する数多くの専門書や論文を著している。これら多くの功績に対して、1948年にはレーニン賞を受賞している。また、1986年のチェルノブイリ原子力発電所の事故の際には個人として復旧作業に参加し、事故後の最も被害が深刻であった時期に医学、生物学分野における中心的人物として活躍した。

チェルノブイリ：虚偽と真実

1998年3月14日 発行

監修：重松 逸造、長瀧 重信

翻訳：本村 智子、浜田亜衣子、高村 昇、本田 純久
芦澤 潔人、山下 俊一、本村 政彦（翻訳順）

発行：長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

〒850-8570 長崎市江戸町2-13

TEL (095) 823-4278

FAX (095) 823-4278

印刷・製本：オムロプリント株式会社

〒856-0016 長崎県大村市原町84-3

